
水の魔方陣・焔の剣 <健全版>

真名あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水の魔方陣・焔の剣<健全版>

【Nコード】

N4999Z

【作者名】

真名あきら

【あらすじ】

小国ティアンナの皇女がさらわれた。

国の為に見捨てられた皇女を救出に向かうのは、昔、皇女に救われた、騎士リベアだけ。

そのリベアに付き従うのは、ティアンナ最強の魔術師・蒼のソルフエース。

一応、BL風味です。苦手な方はご遠慮ください。

ムーンライトノベルズ掲載のエロ無しバージョン。以前、某携帯コンテンツにて発表したものです。

水の魔方陣・焔の剣<1>

醜悪な魔物の上に厚刃の刀身が振り下ろされる。

とどめを刺す筈のそれは、寸でのところで空を切った。

「チツ…！」

大柄な魔物の意外にすばやい動きを目の当たりにして、相對していた男は悔しげに舌を鳴らす。

意思の強そうなど云えば聞こえは良いが、キツイ目つきがますますキツさを増して吊り上り、魔物を睨めつけた。

大型獣の体躯と、それに似合わない動きを備えた魔物の爪が、男を餌食にしようと襲い掛かる。

振り下ろされたそれを厚刃の刀身は、相応しい硬度で跳ね返し、男は反動を利用して後ろへ跳びすざった。

だが、たたみ掛ける様に振り下ろされる爪は、男に息つく暇さえ与えようとしない。

一合、二合、咬み合う爪とう刃とが攻防を続ける。

そんな正面からのぶつかり合いは、所詮人間である男の体力を徐々に奪っていく。

「く…そお！」

魔物の爪を受け止めた、男の額からは滝の様な汗が流れ、彼の限界を知らしめていた。

冗談じゃ、ねえ！ こんなところで……！

男の頭に浮かんだのは、自分に懐いていた幼い少女の無邪気な笑顔。暗い自分の人生を照らしてくれたそれ。

絶対に、助け出す！

そのためにも、こんなところで魔物のエサになるわけにはいかないのだ。

そんな、男の決意を嘲笑うかのように、魔物の爪は彼の目前に迫っていた。

魔物の醜悪な顔が奇妙に歪む。

それは明らかに、獲物を仕留める快感と飢えを満たすことの出来る期待に彩られていた。

ザスッ

肉を裂かれる音が、暗い森に響く。

だが、それは男のものでは無かった。

魔物の瞳が大きく見開かれ、地面がゆらぐ程の音を立てて倒れる。

その喉に突き刺さるのは、爪を受け止めていたのとは別に、男の左手に隠されていた、もう一本の細身の剣だった。

気の抜けた男が、その場にへたり込む。

国境の警備で幾度か魔物に出くわしたことはあるが、こんな大物を相手にするのは初めてだ。

いくら資源が豊富でも、小国に過ぎないティアンナが、独立を保つていられるのは、この大国との国境に横たわる黒の森の所以だ。

この森には人外の者たちが数多く潜み、森へ迷い込んだら最後、決して出て来ることはない。

そこへ敢えて潜入してきたのは彼なりの理由が存在するのだが、いきなりあんな大物が襲ってくるとは。

気楽に考えていた訳ではないが、これからの行程を思っ、彼の気は一気に重くなった。

「ふん、意外とやるもんだな」

頭上から、気配もさせずに降ってきた声は、何処かからかう様な響きを帯びている。

聞き覚えのあるその声に、男は声のした方に恫喝の声を上げていた。

「姿を見せる！ とつとと降りて来い！」

「そんな怖い顔するなよ、リベア。可愛い顔が台無しだろう」

暗い森の枝を分けるようにして降りてきた年若い青年は、すつきりとした容貌をゆがめてそう云う。

男　　リベア・コントラは目の前に現れた美貌の男の、出会ってから幾度と無く繰り返されてきた言葉に、そんな場合では無いと思いながらも脱力した。

確かに、兵士としては幾分小柄ではあるものの、国境警備の兵に相応しいくらいの膂力と体軀は備えている。女に不自由したことは無いが、目の前の男のように困るほどもてた覚えも無い。おそらく、国境警備隊の中で一番若い隊長の肩書きが無ければ、もっと不自由したかもしれない。その程度の風貌だ。

それを『可愛い』などと、この男はまったくもって変わっている。

「第一、何しにこんな森に来た？　守護の魔術師の一人も無しで。死にたいわけじゃ無いだろう」

背の高い青年は、リベアを見下ろすようにして、冷たい視線を投げつけた。

「お前こそ何しに来た、蒼の魔術師？　城下の騒ぎは知っているだろう？」

今頃、城下は大騒ぎになっている筈だ。国境や街道でも無く、城下に魔物が現れるなど、ここ数十年無かった事態だ。

魔術師たちは城下の護りに余念が無い筈では無いのか。

「ちゃんとやるべきことはやってきた。この俺の守護陣に隙など無い」

「そんなことを云うが、その守護陣が破られたから、今の事態になっっているんだろうが」

黒の森を国内に持つ常として、ティアナでは魔術の素養を持つものには、高度な教育と破格の報酬が用意されている。

だからこそ、黒の森が国境にあっても、城下の暮らしは安穩としていられるのだ。

「破られたのは俺の陣では無い。普段なら他の術師の結界に手を出すことなどしないが、非常事態だったからな。リベアこそ、城下に

いなくて良いのか？」

プライドの高い魔術師が、師でもない他の魔術師に結界をいじられたとあっては、今頃、その相手は齒噛みをして悔しがっているに違いない。

今更ながら、リベアは目の前の男がティアンナの最高峰の魔術師と云われる所以を知った。

「俺は騎士団を辞めてきた」

「皇女を攫った魔物の検討は付いていると云う訳だ」

城下に現れた魔物は、婚礼を3日後に控えた皇女と、侍女数人を連れ去った。

「紅の魔術師が、連れ去るのは何か儀式に使う為だと云っていた。だとすれば、連れ去ったのは黒の森の藍鏡の泉の主だろうと」

黒の森の魔物の中でも、もっとも力のあると云われる泉の主。それに立ち向かうのは、死を意味するのと同じことだ。

「それで、俺との契約はどうする気だ？」

「破るつもりは無かったが、結果としては破ることになるな」

リベアは、素直に頭を下げる。どうあっても自分は皇女を救いに行くつもりだったからだ。

蒼の魔術師がリベアの頬に手を掛け、上を向かせる。

視線を上げたリベアに、魔術師の証である紫紺の瞳が飛び込んできた。じつと自分を見つめるその瞳に、魅入られたように立ち尽くすリベアの唇に、魔術師はそっと己のそれを重ねる。

魔術師の舌がリベアの口腔を思う様蹂躪し、名残惜しげに放された瞬間、リベアは我に返って魔術師を突き飛ばしていた。

「そんな場合じゃねえ。お前、ナニする気だよ」

「契約を果たしてもらうに決まっているだろう」

蒼の魔術師は、妙に熱い視線でリベアを舐めるように見ている。その視線は先程の魔物と変わりなく思えた。

水の魔方陣・焰の剣<2>

冴えた光を放つ月が、夜空に掛かる。

その日、リベアはほろ酔いでご機嫌だった。

「おめでとう。リベア」

まだまだ幼さを残す皇女からの祝いの言葉は、つたないものだったが、自分に向けられたものだと思うだけで、心が震えた。

もともと貧困な家庭の口減らしで、城の兵士になったリベアである。御前試合などに興味は無かったが、それでも皇女の期待をこめた瞳に逆らうべくも無く、仕方なく出たまでだ。

だが、皇女は自分の騎士が負けるなどとは思ってもいないし、只でさえ皇女のお気に入りということ風当たりはきつい。ある程度の成績を残さなければナニを云われるか解ったものではない。

負ける相手が隊長クラスならば良いが、一般兵士に負けたりする訳にはいかなかった。

結果としては見事に準優勝。決勝で負けた相手は皇子の教師役で近衛師団の隊長バース・エデンとあっては上出来と云っている。と云うか世渡りの下手なりベアにしては出来すぎだった。

何事にも真剣で熱くなりすぎるくらいの有るリベアが怖かったのは、負けないことに夢中になるあまり、怪我を負わせてはいけない相手に怪我を負わせたり、勝ってしまうと角の立つ人間に勝ってしまうことだ。

しかし、初出場のリベアの組には、高貴な身分の騎士はおらず、リベアは存分に腕を振るうことが出来た。

しかも、決勝の相手であるバースが、リベアの腕前に感嘆し、近衛の騎士にどうかと言ってくれたのだ。今まで、皇女のお気に入りと云うだけで優遇されていると云われていたリベアの実力を認めてくれた人間が出来ただけで、他人のリベアを見る目が変わったことを、

リベア自身が感じていた。

その夜の宴会では、初めて他の隊のテーブルに呼ばれ、振る舞い酒を受け、リベアは何時に無くご機嫌だったのだ。

つい酒を過ぎしてしまい、酔いを醒ますつもりでふらりと庭に出た。下弦の月の美しさに誘われるように散策を楽しんでいたリベアは、いつの間にか、魔術師の住まう西の宮に迷い込んでいた。

「不味いな」

見つからぬうちに帰ろうとしていたリベアだが、どうやらそれは遅かったらしい。

「リベア・コントラ隊長ではありませんか？」

柔らかい声が宮の上から降ってきた。どうやら、見つかってしまったらしい。閉鎖的な魔術師たちの住まいに迷い込んだ自分自身を、リベアは心の中で罵倒する。

「すまん。月の美しさに誘われて迷い込んでしまった。すぐに出て行く、許してはもらえないか」

云いながら、階段の上にいる魔術師を見あげる。

魔術師たちは、男女に関わらずいずれも美しい容姿をしているが、その中でもこの男はとびきりだった。

かといって女性的なものは無い。美しさの中に、硬質な男性的なものがある。紫紺の瞳がリベアを見下ろしていた。

「別に咎め立てする気はありません。リベア殿は本日の主役の一人でしょう。このような所におられてもよろしいのですか？」

柔らかい笑みを浮かべたまま、魔術師が階段を降りてくる。その顔に見覚えがあった。

「はじめましてですよね。正式には。私の名はソルフエース・クラ
イ」

「ああ。何度か見掛けたことはあったが……。一応、はじめましてだな。蒼の魔術師殿」

リベアは用心深く応えた。蒼のソルフェース。この国では最高峰といわれる魔術師の一人だ。通常、魔術師には名乗る習慣は無い。それはその真名を魔術の封じに使われる為だ。

正式な名を告げるのは、自分より上位の魔術師に限られる。

「ソルと呼んでもらっても構いませんよ。リベア殿になら」

だが、リベアの用心を、ソルフェースは鼻先で笑い飛ばした。馬鹿にしたような言い草に、只でさえ薄いリベアの抑制心は切れ掛かっていた。

「それに、魔術師としてではなく、話があるのです」

「話　だと？」

すんでに走った殺気に近いものを感じて、リベアはその場を飛びのいた。

リベアが寸前までいた場所を、鋭い切っ先が掠めていく。

「魔術師ッ？」

「へえ、中々の腕前だ。やはり御前試合の上位者ともなると違うものだな」

ソルフェースは長い刀身を隙無く構えていたが、それは唐突にその手に現れたようにしか見えなかった。

「貴様、一体……」

何故に切りかかれるのかさっぱり解らず、ただ唾然とするリベアとは反対に、ソルフェースはゆったりとした笑みさえ口に刻んでいる。

「俺は、今まで誰にも負けたことが無いんだ。お手合わせ願いたい」
魔術師は先ほどまでの丁寧な敬語もなくなり捨てていた。

本気だ。そう悟ったリベアは腰の剣を抜く。

「俺は、そんな訳の判らん戦いをする気は無いと云っても、無駄なようだな」

お互いに、剣の位置は確実に相手を屠ることの出来る処だ。

「もちろん、ただでとは云わん。リベア殿が勝ったのなら、この蒼のソルフェースが守護に就こう」

騎士団自体に守護の魔術師が就くのは、別段珍しいことではないが、個人的にとなれば、話は別だ。余程の高貴な騎士ならともかく、たかが国境警備の兵士となれば、破格の待遇である。

「それはまたすごい。だが、俺が勝ったら。と云うことは、負けた時の条件もあると云う訳だ？」

お互いに一歩さえ引けない状況だと云うのに、リベアはまだ無為な争いごとはしたくないと考えていた。自分のプライドなどたいしたものでは無い。条件が呑めるものなら、呑むつもりで、リベアはソルフェースに問い掛ける。少なくとも、城内で魔術師と争ったと云うだけで、後ろ盾など無い、リベアごときの首は簡単に飛ぶ。

「まだ、その気にならないと云う訳だ。まあ、俺はどちらでもいい。リベア殿、貴方のその軀、俺の自由にさせてもらう」

にやり笑うと美男子の魔術師の顔に、下卑た色が浮かんだ。あまりに似合わないその表情と言葉に、リベアはあっけに取られてしまう。

「魔術師の趣味は変わっている」

口に出したのはそれがやっとだ。魔術師自身も、同僚の魔術師たちも、一様に見目麗しい賢者たちだ。それが何故に、平凡を絵に描いたような自分であるのか。

「リベア自身が知らないだけだ。剣を振るう貴方は十分に美しい」余りにストリートに云われて、リベアはそんな場合では無いというのに、頬が熱くなった。

「リベア、いいか？」

戦う条件はそれでいいのか。と、問われて、リベアは再び剣を構えた。頭を下げると云われれば、いくらでも下げるが、その条件はさすがに呑めない。

「本気で行くぞ」

「望むところだ」

リベアの宣言に、ソルフェースが応えた。

ソルフエースはすばやい動きで、リベアを翻弄する。振り下ろされる刀を受け止めているだけだ。

だが、リベアの剣は実用一辺倒の厚刃のものだ。うまく逃がせば、ソルフエースの持つ細身の剣等、ものの数では無い筈。

何合も打ち合つて、魔術師の疲れを待つ。

自分より長身ではあるものの、兵士である自分に、実戦経験の無い魔術師が対抗できる筈が無いと高を括っていた。

渾身の力で振り下ろされたソルフエースの剣を、余裕を持って受け止める。

余裕が無ければ、リベアの方が圧倒的に不利だった。と云うのも、これも御前試合と代わらず、相手に怪我をさせてはいけないと云うハンデが存在していたからだ。

受身に徹し、疲れたところを見計らつて、一撃で打ち倒すことしか、完全な勝機は無い。

月明かりが剣を振るう二人を静かに照らす。

だが、ふつとソルフエースの斬撃が止んだ。

どうやら、疲れを誘う作戦は見破られてしまったらしい。

そうになると、今度は自分で打ち込んで行くしかない。だが、実用重視の厚刃の剣は、闇雲に振り回しては己が疲れるだけだ。

慎重に隙を突いては剣を繰り出していく。

振り下ろしたリベアの剣を、ソルフエースはギリギリのところまで飛びのいた。

着地した間もあればこそ、次の斬撃がソルフエースの頭上に振り下ろされる。

繰り出されるそれをソルフエースは剣で受けようとはしなかった。

さすがに、こんな細身の刃では受け止めることが出来ないことは解りきっているらしい。

「覚えているな？」

ソルフエースが念を押す。

先ほどの条件のことだと、いくら鈍いリベアにも察しは付いた。それに応えることなく、リベアは身体をかわすソルフェースに無言で突きこんでいく。

ソルフェースは、だが、今度は避けることをせずに、剣を受け止めた。

打ち込む力に、ソルフェースの剣がしなる。

じりじりと力を強めるリベアとソルフェースの視線が絡んだ。

「覚えているな」

確かめるように、もう一度ソルフェースが云う。それにリベアがうなづいた。

瞬間　　リベアの剣が宙を舞った。

リベアは信じられずに、呆然と己の剣の行方を追う。勝負は付いていた。

戦場ならば、自分の片腕は飛んでいた筈だ。

「俺の、勝ちだな」

息を荒くして、正面に立つ男を、リベアは悔しげに見つめたが、それではどうなることでもない。

「ああ。お前の勝ちだ。蒼の魔術師」

リベアの言葉に、蒼のソルフェースがニヤリと笑った。

むっとしたが、リベアには逆らうことは許されていない。

「リベア。俺のものだ」

そっぽを向いたリベアの軀を引き寄せて、魔術師が囁いた。

「勝手にしろ」

乙女でもあるまいし、こんなところで恥ずかしがっている方が馬鹿馬鹿しい。

所詮は、魔術師の気まぐれだろうが、付き合わされる方はたまったものでは無い。悔しさに唇を噛み締めても、どうしようもなかった。

水の魔方陣・焰の剣<3>

西の宮の中に伴われたリベアは、そんな場合では無いと云うのに、もの珍しげに周りを見廻した。

魔術師たちは閉鎖的で、外に出るのは結界儀式の際か、騎士団の守護に就く時だ。西の宮に入れる機会など、近衛騎士団の人間でもめったに無い。

リベアが立場を忘れて見廻すのも、無理の無いことだ。

外観もそうだが、中の造りも質素なものだった。

「何を見ているんだ？」

「いや、意外と質素な暮らしぶりに驚いている」

「魔術師は自給自足が旨だ。広さは必要だが、豪華さはいらん」

「司祭どもの俗な生活ぶりを見てみると、魔術師も似たようなものかと想像していたのさ。誤解だったな、すまん」

暗い廊下には最低限の明かりが灯されているだけだ。その先を進んでいたソルフエースが、いきなり頭を下げたりベアに立ち止まる。

「謝ることも無いだろう。俺たちはそう云う生活をしていないだけで、街に住む魔術師はやっているかもしれない。魔術は金になるのは判っているからな」

実際、辺境の地ならばともかく、大きな街ならば、商人や司祭等と組めば、大きな利益を手にすることが出来るのだ。

王に仕える身であると自覚をするからこそ自重もするが、街でどんなことが行われているかは判ったものではないのだ。

「リベアは何処の出だ？」

部屋の明かりを灯して、ソルフエースは問う。

明かりに浮かんだのは、大きなベッドと書き物机と書棚だけだ。これから行われることを思っつて、リベアは顔を伏せた。

「俺は、クライトンの出だよ」

「クライトン……。聞いたことの無い街だな。東部か？」

東部は海に近い入り江のそばに広がる地域だ。王宮からは離れてはいるが、近隣の国との貿易の盛んな豊かな土地だ。

「いや、ガンデス様の領地だ。王宮には近いが、とんでもない田舎町さ。アデナ山のそばにあるやせた土地だ。若い男は兵隊に行かなければ食って行けない。城下の人間は知らないだろう」

「ガンデス領にそんなところがあったんだ……あそこは順調に年貢は納めていると思ってたが」

話しながら、ソルフエースは酒のグラスをリベアに握らせる。

「ガンデス様はお優しい方で、貧しい人間からは年貢はお取りにならないんだ。その代わりに働き口を世話してくださって、俺たちは、給金から年貢を納めることが出来る」

ガンデスと云う領主は、非常に懸命な市政を引いているらしい。稼いだ人間から年貢を取るのは当たり前だが、貧しければ取られないと云うのでは、勤労意欲が下がる。その代わりに貧しい村の若者を街で働かせて、そこから年貢を取るとは、理にかなったやり方だ。ソルフエースは、リベアの話に聞き入った。

「リベアは、それで兵士になったのか？」

「ああ」

リベアはぐいっと酒をあおった。やるんなら早く終わらせて欲しい。無意味な会話などしていたくなかった。

空になったグラスを玩んでいた手首を引かれ、リベアはベッドへ倒される。

歯を食いしばり眼を閉じた。

「リベア」

耳元で魔術師が自分と呼ぶ声がする。

「そんなに噛み締めると、唇が切れる。眼は閉じていてもいいからまるで、恋人に囁くようにやさしく云われて、情けなさに泣きそうになった。いつそ、乱暴にしてくれた方が思い切りが付く。

噛み締めていた唇を開くと、意外にも優しい口付けが落ちてきた。

リベアの軀を優雅な動きの指が辿る。

どう意地を張っても、所詮は男の肉体は簡単なものだ。嫌悪や侮蔑の感情があればすぐに反応しなくなるが、そうでもない限りは直接の刺激に抗うことは出来ない。

リベアには、魔術師に負けた自分が情けないという思いはあったが、男同士のそれに嫌悪を感じている訳では無い。

何故なら、剣を合わせている間に解ったからだ。魔術師が真剣なのだ。

それに、王宮内での私戦だ。受けた時から、リベアは半ばこの男に従うつもりでいた。ただ素直にそうする訳にもいかず、一度交えてしまった剣を引くことも出来なかった。

とことん不器用な男なのだ。

口付けが解かれると、リベアは漏れそうになる声を殺す為に、再び唇を噛み締める。

自分の口から娼妓のような声を漏らすのは、嫌だった。

ソルフェースの指は、やさしくリベアの軀を辿る。口付けはあらゆる所に落ちてきて、リベアを落ち着かなくさせた。

女を相手にするときと代わらぬ状態に、軀が興奮を示す。

良い香りが部屋に漂う。それはリベアもかいだ覚えのある香りだ。

娼妓たちが楽に客を受け入れる為に使う香油の香り。

濡れた指が自分の足の間を探った。

目を閉じて、ソレだけを追っていれば終わる筈だと、いよいよもって硬く目を閉じて唇を噛み締めていると、軀の上の重みがふっと無くなった。

「やれやれ、とことん強情だ。本気で抱くぞ？」

呆れたような響きに、目を開くと優しい瞳でソルフェースがリベア

を見下ろしている。

「本気だったんじゃないのか？ 魔術師」

「多少は強引でもいいかとは思ったが、強姦は趣味じゃ無い」

「条件は俺も納得した。強姦とは違う」

リベアが軀を起こすと、ソルフェースは苦い笑みを浮かべた。

「本当に嫌なら突き飛ばして逃げられるくらいの余裕は与えるつもりだったさ。それでも俺の腕の中にいるなら、本気で抗ってはいないだろう。だが、リベアは俺が王宮魔術師だから逆らわないだけだろう」

確かにその通りの事実を指摘されて、リベアはうつむいてしまった。国境に魔物のいる黒の森をもつこの国では、魔術師は非常に大事にされている。自分のような身分のものが逆らえる相手では無いのだ。しかも、村では多くの兄弟たちが自分の稼ぎを当てにしている。逆らうことも、逃げ出すことも叶うはずが無かった。

「まあ、これで俺が本気だと云うのは解っただろう。それと、俺を拒否してもいい大義名分も作ってやろう。身分で相手の軀を開かせるなんざ、強姦よりタチの悪い真似はしたくない」

「大義名分？」

そんなことが出来るのだろうか。いくら国境警備の小隊を任されているとはいえ、リベアは所詮、平民だ。魔術師をソデにしたなど、自分たちが良くても、周りが放っておかない。

しかも相手は目立つことこの上ない蒼の魔術師だ。何処で人の口にするか解ったものでは無かった。

「お前の守護に俺がなる。俺の真名は名乗ったな。『ソルフェース・クライ』だ」

「そ、そんなこと……。いいのか？ 簡単に」

確かに、魔術師が守護を誓った騎士だと云うならば、その魔術師と騎士の間には、王でさえ口は挟めない。

それに、個人的に守護を結ぶ魔術師など、国が安定した昨今ではめったにいないのだ。

「本気でリベアを気に入ってるんだ。護りたい。ならば、守護に就くのが一番早い」

紫紺の瞳がリベアを見下ろしていた。自分は、それほど価値がある人間だろうか？ 今だって、ずるいだけでは無いのか。魔術師を受け入れるつもりだったのは、その方が面倒が無いからだ。

「そこまで甘えるつもりは無い」

そんな価値がある訳が無い。魔術師が本気ならば、惜しいようなものでも無かった。

リベアは半端にまとわりつく服を、全て脱ぎ捨てる。

「解った。じゃあ、遠慮なくその軀は貰うぞ」

魔術師はゆっくりとリベアに覆いかぶさってきた。

「リベア」

呼ばれて顔を上げると、ソルフェースの激しい口付けがリベアを襲う。

舌を吸われ、齒列の裏を舐め上げられて、リベアの軀が震えた。

ただ、翻弄されるのは悔しくて、リベアもソルフェースの口付けに応える。

「リベア・コントラ。俺の騎士」

そんなささやきがリベアの耳を掠めたのは気の所為だったのか。リベアの意識が沈むのには、その時間は掛からなかった。

水の魔方陣・焔の剣<4>

皇女・レイシアの茶会に呼ばれたのは、昼過ぎのことだった。

あれから、数日が過ぎていたが、何と無しにリベアは自分が遠巻きにされているのを感じていた。

だが、元々、城下に長居する気など無いリベアには、あまり関係が無い。未だに上司に呼び出される様子の無いということは、首になる心配は無さそうだ。

どっちみち、明日には自分は国境の警備に戻る。

「リベア、すごいわ。誰の騎士になったの？」

だから、お茶の用意をする為に、侍女が下がったのを待ちかねたように、レイシアが勢い込んで聞いてきたときも、何のことだと首を傾げずにはいらなかった。

「そうだよ。私にも、レイシアにも内緒だなんて水臭いじゃないか」
幼いとは云え、皇女も輿入れを望まれる歳だ。そうなっただけからは、ちいさな皇女のお付をしていた頃からの馴染みではあるものの、皇女と会うときには、誰か付き添うことになっている。だが、今日はレイシア姫の兄皇子・レイディエが一緒だった。

元々、幼い弟や妹の面倒を見ることの多かったリベアは、最初に離宮の門番だったところにこの兄妹の我俣を乳母よりも上手にいなしていたのだ。

もちろん、身分の違いはわきまえてはいるが、それでもこの兄妹を護る騎士でいることが、リベアの誇りなのだ。

その自分が、一体今更、他の誰の騎士になるといつのだろう。

「皇女、皇子。おっしゃっている意味が解らないのですが……」

「ひどいわ。リベアは！ 私にも内緒だと云うの？」

リベアが云い終わらないうちに、レイシア姫が抗議の声を上げる。

「リベア。じゃ、私にはいいよね？ 男同士なんだから」

からかう口調でレイディ工皇子が後を続けるが、リベアにはまったく何のことも解らなかった。

「一体、どんな魔術師がリベアの守護に就いたんだ？ 契りはもう結んだのかい？ どんな美女だった？」

好奇心を隠し切れない様子で、若い皇子は瞳を輝かせたが、リベアは大慌てだ。

「あ、あの皇子。一体、何処でそんな話が……」

リベアの慌てようを見て、さすがに皇子と皇女が顔を見合わせる。身分は違っても兄のように慕った人の慌てぶりは、尋常では無かった。

「もしかして、リベアは知らずに受け取ったの？」

可能性としてはありえない話ではない。リベアは平民で城下の出ではない為、自分たちの間では常識になっていることを知らないことは、ままあった。

「その指輪。魔術師の守護の指輪だよ」

皇子の言葉に、リベアは、数日前から自分の指に嵌っている古ぼけた指輪をじっと見下ろしてしまった。

リベアの刀が襲い掛かる魔物を刺し貫く。

暗い森の中に、リベアが振るう剣の煌きだけが光る。

幾多の魔物がリベアの厚刃の刀に屠られて行った。

「戦い方も慣れてきたな」

森の中へ入って数日が過ぎている。息つく暇も無くと云う程では無いにしても、襲い掛かる火の粉は確実に増えている。

それこそが、目的地に近づいていることを示していた。

「お前が結界を張ってるからだろう。何も気にしなくていい」

リベアの後ろで、ただ見ているだけと云う風を装いながら、ソルフ

エースがさりげなく結界を張っているのは、解っている。

魔物退治を主にする、第一騎士団の連中とは違い、地味な国境の砦を護る為の戦闘の経験しか無いリベアには、人間相手では無い戦いの知識等無い。

だが、騎士団の中で聞きかじった話くらいは知っている。魔物の体液が人間にはあまり良くない場合もあることも。

それを避ける器用な戦い方を学んだ訳でも無い自分が、身体に一滴の返り血も浴びていないのは、おそらくは後ろのソルフェースの所為だ。

「蒼の魔術師　　。何故、付いてきた？」

「契約を果たしてもらおう為だ。お前は俺のなんだ。粗末にされては困る」

確かに自分を好きにしてもいいとは云ったが、数度も関係を持てば、ソルフェースが飽きると踏んでのことだ。

それが、半年以上過ぎた今も、ソルフェースは自分を求めてくる。どこか、勝手に『守護の指輪』をはめ、契約を交わしてしまった。リベアに何事かが起これば、それはすぐにソルフェースに伝わり、その真名を呼べば、リベアを護る為に、比喻ではなく時空を超えて駆けつける。

魔術師の守護を得るとはそう云うことだ。魔術師の真名は絶対的な服従を得ることが出来る証明なのだ。

それを知っているからこそ、リベアはあえてソルフェースの名を呼ぶことを避けていた。

「水の匂いがする。その先に泉があるな」

「じゃ、水の補給をして、野営の準備だ」

ソルフェースが鼻を鳴らすのに、そっけなくリベアが応じた。只でさえ魔物の横行するこの森の奥で、夜に行動するのは馬鹿のすることだ。

熟睡出来る訳では無いが、横になって身体を休めるだけでも違う。

そつと周りをうかがいながら、泉に近づいた。生き物である限りは水を必要とする。魔物がいるとは云え、獣のたぐいがまったくいない訳では無い。そういう獣たちにとって、泉は理想的な狩場だ。獲物になりたくなければ、用心しすぎることは無い。

「人の声がする」

「こんなところで？ 馬鹿な」

ソルフェースの言葉に、反射的にそう返したものの、確かに人の声らしきものが漏れてくる。

ソルフェースが唇を塞ぐように、リベアの唇に人差し指を当てた。

誰だ？

目線で問う。

そこに居たのは、二人の男だ。

二人ともが身分の高そうな騎士だ。旅装は重厚な絹のものだし、腰の剣も立派な造りのものだ。

だが、この身分ならば付いてきて当然のお供らしい人間がいないのが気になる。いかにも訳有りというのがリベアにも見て取れた。

「ネイ。すまん。こんなところまで付き合わせて」

「構わんさ。お前がはじめて本気で惚れた女の為だ」

「ネイ。ありがとう」

二人の騎士は話をしながら、水を汲んでいる。

話の内容からは、魔物とは思えない。だが、王宮で見知った顔では無かった。王宮に顔を出さない騎士も存在するが、それは勝手の許されるまだ若い騎士だ。

目の前の二人は、男として成熟した大人の男だ。旅装も異国風であることを見ると、おそらく異国の身分の高い騎士に違いない。

ただ、今現在、このティアナは城下に魔物が現れ、皇女は囚われの身だ。そんな中で異国の旅人が、国境の森に危険を犯して入り込むことの意味を考えると、リベアは平静ではいられなかった。

只でさえ、皇女がさらわれ、魔物が現れたことで浮き足立っている。そこに目を付けられたら、小なりと云え独立を保ってきたアルセリアは、あっと云う間に瓦解してしまう。
リベアはぐっと剣を握り締めた。

間者か。密使か。どっちだ？

目線でソルフェースに訴えかけるが、ソルフェースは視線を受け止め、うなずくのみだ。

リベアに従うと、瞳は雄弁に物語る。

自分に殺気を向けて来ない人間を斬るのは初めてだ。

リベアは知らず、緊張に乾いた唇を舌で湿らせる。

ぐっと剣を握り締め、リベアはその男の前に躍り出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4999z/>

水の魔方陣・焰の剣 <健全版>

2012年1月6日23時48分発行